

滅ぼしてください

丸山 勉

[聖書] 詩編 139 編 13～24 節

139:13 あなたは、わたしの内臓を造り母の胎内にわたしを組み立ててくださった。

14 わたしはあなたに感謝をささげる。わたしは恐ろしい力によって驚くべきものに造り上げられている。御業がどんなに驚くべきものかわたしの魂はよく知っている。

15 秘められたところでわたしは造られ

深い地の底で織りなされた。あなたには、わたしの骨も隠されてはいない。

16 胎児であったわたしをあなたの目は見ておられた。わたしの日々はあなたの書にすべて記されている まだその一日も造られないうちから。

17 あなたの御計らいは わたしにとっていかに貴いことか。

神よ、いかにそれは数多いことか。

18 数えようとしても、砂の粒より多く その果てを極めたと思ってもわたしはなお、あなたの中にいる。

19 どうか神よ、逆らう者を打ち滅ぼしてください。わたしを離れよ、流血を謀る者。

20 たくらみをもって御名を唱え あなたの町々をむなしくしてしまう者。

21 主よ、あなたを憎む者をわたしも憎み あなたに立ち向かう者を忌むべきものとし

22 激しい憎しみをもって彼らを憎み 彼らをわたしの敵とします。

23 神よ、わたしを究め

わたしの心を知ってください。わたしを試し、悩みを知ってください。

24 御覧ください わたしの内に迷いの道があるかどうかを。

どうか、わたしを とこしえの道に導いてください。

[序] 永眠者記念礼拝と墓前礼拝によせて

今日の礼拝は、「永眠者記念礼拝」として捧げています。また、午後には私どもの教会墓地である山城霊園に行って、そこでもそのお墓に名前が刻まれている方のことを特に覚え、短い礼拝を捧げることになっています。この頃は本当に天候が不順で心配でしたけれども、今日は何とか雨が降らないで済むでしょうか。

既にこの地上の旅を終え、召された方々を記念するということは、ただその方々を懐かしむことではないと思います。思い出ももちろん大事ですけれども、**その方々の人生の旅路が私たちに語ってくれているものが必ずあります**。神様ご自身が、その方々お一人ひとりの生き様、また死に方、そして残してくれたものを通して語ってくれているものを受け止めて行きたいと思います。教会は永眠者記念礼拝を毎年致しますが、それはある意味、今の私たちそれぞれの人生の旅路、それをいかに歩んでい

くのかを、ちょっと足を止めて考える“一里塚”にもなるのだと思います。要は、もう一度神様と私たちの関係を考えるこの日なのだと思います。

[1] 神様の驚くべき御わざによって造られたわたしたち

さて、今日私たちに与えられているのは、詩編の139編です。スケールの大きな詩編だと言ってよいと思います。「詩編」というのは、世界最古の賛美歌なのです。この詩を、素朴なメロディもつけながら皆で声を合わせて歌うことで、歌う者自身の中に「ああ、本当にそうだ、神様はそういうお方だ」と、信仰の思いが新しくされたと思います。私たちも本当はこれを、歌えたら良いのでしょうね。

今日のこの詩編139編は、しかし、読むだけでも、この私を包み込んで下さる神様、造り主の大きさが心に伝わって来、「アーメン」と言いたくなります。先ほどは13節以降をお読み頂きましたけれども、そこに至る1～12節も読んでみたいと思います。本当に素晴らしい言葉です。お聞き下さい。

「主よ、あなたはわたしを究め わたしを知っておられる。
座るのも立つのも知り 遠くからわたしの計らいを悟っておられる。
歩くのも伏すのも見分け わたしの道にことごとく通じておられる。
わたしの舌がまだひと言も語らぬさきに 主よ、あなたはすべてを知っておられる。
前からも後ろからもわたしを囲み 御手をわたしの上に置いていてくださる。
その驚くべき知識はわたしを超え あまりにも高くて到達できない。
どこに行けば あなたの霊から離れることができよう。
どこに逃れば、御顔を避けることができよう。
天に登ろうとも、あなたはそこにいまし
陰府に身を横たえようとも 見よ、あなたはそこにいます。
曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも あなたはそこにもいまし
御手をもってわたしを導き 右の御手をもってわたしをとらえてくださる。
わたしは言う。「闇の中でも主はわたしを見ておられる。夜も光がわたしを照らし出す。」
闇もあなたに比べれば闇とは言えない。夜も昼も共に光を放ち
闇も、光も、変わるところがない。」(139:1～12)

私たちはともすると「自分のことは自分が一番良く知っている」と言ってしまふことがあるのではないのでしょうか。しかし、この詩編の作者はそうは言いません。“わたしの舌がまだひと言も語らぬさきに”神様は私を知っておられるのだ、そしてこの神様は、“前からも後ろからもわたしを囲”んでいて下さる方だと語り、自分がどんな場所に置かれようとも、いや、死んだ後に「陰府」に身を横たえようとも、神様は、私自身のことを、常にその御顔の中に置いていて下さるのだ、そこから逃れるなどということはあり得ない事だと、大きな神様をほめ讃えているのです。

さらに、13 節以下の言葉も驚くべき言葉に溢れています。例えば、15～16 節にはこうありました。

「秘められたところでわたしは造られ 深い地の底で織りなされた。あなたには、わたしの骨も隠されてはいない。胎児であったわたしをあなたの目は見えておられた。わたしの日々はあなたの書にすべて記されている まだその一日も造られないうちから。」

既に主の許に帰った人々も、皆一人ひとりが神様によって、ユニークな、かけがえのないたった一人しかいない存在（それは、驚くべきことに未来永劫一人だけなのです！ クローン人間を作らない限りは！）として、神様の秘められた所、しかし、「あなたは生きよ！」という造り主の意思の中で造られたのです。（私も昨日誕生日を迎え、何と 60 才になりました！ 皆さんからのお祝いの言葉を感謝しています。そして、親にもですが、誰より神様に感謝を捧げなければと思いました。）

先週も少しご紹介した、G・A・F ナイトという人の「詩編」の注解書（Dairy Study Bible）の中で、彼は、この節についてこう述べています。

「神は混沌の中から、或いは混沌をも意に介さないで、創造をする。神は、形なき物から私を造ったのである。…それゆえ詩編作者は、その密かな行為、特に胎内における自分自身の創造のゆえに、神を讃える。神の創造に関する発想は全く膨大である（17 節「いかに数多いことか」）。今日の科学者は、この神秘に満ちた宇宙と我々の人体について知れば知るほど、我々は自分たちが知らないことを益々気付かされる、と謙虚に告白する」。

この地上を歩みぬいた一人ひとりがそうであるように、わたしと云う一人の存在は、あなたという一人の存在は、**神様の創造の御手に**拠っている以上、それは**全宇宙と全く同じ意味と重さを持つもの**なのです！ それは私たちの思い込みではありません。聖書がその**神秘**を、わたしたちに開いて語ってくれているのです。

[2] 復讐の心をどうするか

このようにこの詩編は、まるで**大きな海のように**私たちを包み込んでくれます。或いは、**大きく静かに流れる大河のように**、私たちの人生に**平安**を与えてくれる詩編だと言えるのではないかと思います。しかし、19 節から 22 節は、何故こんな言葉が入っているのだろうか**と疑問に感じるような激しい思いがむき出し**になっています。まるでこれまでの美しい調べを打ち破る、ティンパニの連打のような言葉です。

「どうか神よ、逆らう者を打ち滅ぼしてください。わたしを離れよ、流血を謀る者。たくらみをもって御名を唱え あなたの町々をむなしくしてしまう者。

主よ、あなたを憎む者をわたしも憎み あなたに立ち向かう者を忌むべきものとし 激しい憎しみをもって彼らを憎み 彼らをわたしの敵とします。」(19～22)

何度も「憎み」とか「憎しみ」とか、「逆らうもの」とか「敵」という言葉が出てきます。学者によっては、これは違う人の言葉がここに入り込んでいると捉える人もいます。この言葉の激しさが、まるで違う人の様な印象を拭えないからです。…しかし、どうでしょうか？ **これが私たちの心のリアリティーなのではないでしょうか？** 私たちの心はいつも晴れ渡った晴天の風の海の様な状態という訳ではなく、**自分の生命や尊厳が脅かされれば、心に嵐が起こる様な状態が、或いは激流の様な状態がやってくる**ことがあるのではないのでしょうか？ この詩編の作者は決して“二重人格”ではないと思います。神様の御わざに圧倒され、その神様をほめ讃えているのもわたしですし、何者かの存在と振る舞いによって、全く平安のない状態になってしまった時、「**神よ、逆らう者を打ち滅ぼしてください**」と激しく訴えているのも同じわたしののです。

それではこの叫びは、訴えは、不信仰な訴えなのではないでしょうか？ 決してそうではありません。もしも**自分の手によって復讐するのであればそれは不信仰**です。神様を飛び越えています。しかし、この詩の作者はそうではなく、その敵と思える存在が、神様を憎み神様に立ち向かっているがゆえに、“**まことの支配者である神様、どうかあなたがこの事態に介入して、この事態を打ち破ってください**”と、神様の義に寄り頼んで、そこにこそ平安の回復が与えられることを信じて神様に祈っているのです。

W・ブルツゲマンという人は、『詩編を祈る』の中でこのように言っています。—「復讐は人間のすべきことではありません。復讐が神の手に委ねられているので自分もはや仕返しをしたいという思いに悩まされる必要がないのだと断言することは、私たちが自由にします。詩編の作者はそのことを知っているように思えます。…何かの復讐の思いを神の手に委ねないことは、自分たちの方が神よりもうまく出来ると考えていることで、それは神を信じていないことです。復讐は神のものだと言い切ることは、事実上の神への服従行為なのです。」と。…これは本当にそのとおりだと思いました。

[3] 私たちを造り変えて下さるお方がいる

しかしどうなのでしょう。私は思うのですが、憎しみを抱くということが人間にはあるということは良く分かりますし、そして、それを神様に委ねるということも分かる気がするのですが、何かスッキリしないのです。それは何なのだろうと考えたのですが、「神様、敵を打ち滅ぼして下さい」と、**それで完全に自由になってしまっ**てよいのか、いや**自由になれるのか**、という戸惑いです。確かに、神様にお任せすることが信仰なのだと思います。けれどもそれで自分は変わらないままで良いのだろうか、という思いが残るのです。それではどこか自分と向き合うということ回避しているのではないか、という問いです。

そこで思い起こしたのがあのパウロの叫びの声です。ローマの信徒への手紙 7 章 24 節。「わたしは何と惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から誰がわたしを救ってくれるでしょうか」。この叫びは、クリスチャンであるなしに関わらず、生身の人間の叫びだと思います。わたしという存在は、確かに神様に造って頂いた尊厳があるのですけれども、その心、魂は、敵への報復を喜ぶような、誰かの滅びを喜ぶような罪がこびり付いているのです。—「誰が、この死の体から救ってくれるのか」。

パウロは、「誰が」と言いました。彼は知っているのです。本当に救ってくれる方を。

主イエス・キリストは驚くべきことを仰いました。あの山上の説教で、「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子とならせるためである。父は善人にも悪人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。…あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」（マタイ 5:44-45、48）と。…「完全な者になれ」と言われると私たちはひるみます。そんなのは無理だと思います。確かに無理です。自らの力では到底無理です。しかし、私たちの代わりにあの十字架に架かり、およみがえりになった主は、今、聖霊と共に、私たちの内に宿って下さっているのです！ 旧約聖書の時代ではある意味隠されていた神様の本当の憐れみの力が、イエス様を通して、聖霊と共に私たちの中に流れてきているのです。このイエス様が、そして聖霊が、私たちを造り替えて下さいます。

いつも礼拝の最後に祝祷をする際、私はテサロニケの信徒への手紙一の 5 章 23～24 節をまず語っています。覚えていらっしゃるでしょうか。こういう言葉です。

—「どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにして下さいます。」

この中で、「主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように」という部分が気になるのでしょうか。しかし「私はとてもそうなれないな」なんて思う必要もないのですね。あなたがあなたの方でそうなるのだ、などとは言っていないのですから。ただ、「主イエス・キリストの来られるとき」=この世界の救いを完成するためにもう一度主が栄光の内に来られる時に、主ご自身が私たちをそのような者として迎えて下さる、という約束がここにはあると思います。パウロは、自分のことを振り返りつつ語っているのでしょうか、「あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにして下さいます。」と確信を持って語っています。

[結] 「静まれ、黙れ」と嵐を滅ぼして下さる主イエス

私たち、まだ地上の生を生きる者は、その救いの完成の日を待ち望みつつ生きるのですね。その旅路、その途上で、私たちはこの詩編 139 編 23～24 の言葉を自分の祈りとして行けば良いのだと思います。

「神よ、わたしを究め わたしの心を知ってください。わたしを試し、悩みを知ってください。御覧ください わたしの内に迷いの道があるかどうかを。どうか、わたしを とこしえの道に導いてください。」

敵は外にいただけではありません。いえ、一番の敵は私の心、人を許せない私、自己中心な私なのだと思います。それが時に「嵐」になるのです。

先ほど皆で讃美歌の「人生の海の嵐を」を歌いました。本当に、海は嵐のような時だけではありませんよね。でも、仕方ないと思います。それが自然というものです。ガリラヤの海(湖)もそうだったようですね。変化が激しい。穏やかで、船で向こう岸へ進むのに何の苦勞もないと思っていた時、突然に突風が吹き荒れ、死ぬほどの恐怖を弟子たちは覚えたと言う記事がマルコ福音書4章に記されています。「イエス様、私たちが溺れてもかまわないのですか！」と弟子たちは叫びました。自分たちではどうすることも出来ない状況です。正に「逆らう者を打ち滅ぼしてください」という叫びそのものではないでしょうか。

そしてその時、イエス様は舟の中で寝ておられたのです。これは凄いことだと思います。イエス様は、波猛る海、雨と風、嵐の中にありながら、平安でいらしたのです。その神様の平安をお持ちのお方が、いざとなったら、その弟子たちに恐怖をもたらす原因であるその嵐に向かって「静まれ、黙れ」と、或いは、罪の力に向かって「滅びよ」と命じて下さり、私たちを救い出して下さるのです。また、救い出されて来たのです！

どうぞ、あなたが恐れを感じたら、また、自分の罪に負かされそうになったら、イエス様を叩き起こしてください。きっとあなたを天の港に到着させるまで、何度も何度もその風と海に向かって「静まれ、黙れ」と、神の權威を持って私たちを導いて下さいます。

先に召された方々も、一人ひとり違う人生の戦いをしながら、今はゴールにおられます。その先人の信仰を思い起こしながら、今与えられている私たちの航路を、主に導かれながら、ご一緒に進んで参りたいと思います。

お祈り致します。